福島潟の開発の先がけ　山本丈右衛門

山本丈右衛門は頸城郡鉢崎村（柏崎市）の出身です。詳細は不明ですが、百姓でありながら船を使った商売をしていたとも、松平伊豆守の家臣だったともいわれています。

丈右衛門が、福島潟の開発を幕府に初めて願い出たのは1742（寛保2）年のことですが、このとき許可は出ませんでした。しかし丈右衛門はあきらめず、再び開発を願い出ました。当時、福島潟は新発田藩の領地だったので、幕府は、潟周辺の33ヵ村を1754（宝暦4）年に幕府の領地とし、その翌年、丈右衛門に開発を許可しました。許可されたのは、水面と草生地、303haでした。

丈右衛門は、今の東京都葛飾区のあたりに所有する土地などを抵当に入れ、3,000両の資金を作り、不足分は資金援助を受けて、開発工事を始めました。

工事は、潟に流れ込む水量を減らしつつ、潟の排水をうながすため、新発田川・太田川などの流路変更が行われました。

しかし、1770（明和7）年11月、新鼻や太田など約89ha（石高は1,910石）を開発したところで、丈右衛門は亡くなってしまいました。あとには4,700両以上の多額の借金が残り、その後、丈右衛門の開発地はすべて幕府に没収されてしまいました。

丈右衛門の供養塔（前新田の延寿庵）
丈右衛門夫婦の戒名が刻まれています。1818（文化15）年建てられたもので、その後に潟開発を行った市島徳次郎ら「水原十三人衆」が50回忌を記念して建立したと伝えられています。

丈右衛門の墓（新鼻）
1864（元治元）年、潟開発に係わっていた斉藤七郎治永治が、丈右衛門を慰霊するために建てたといわれています。

開潟神社（新鼻甲）
福島潟と周辺一帯の開発の先駆者、丈右衛門と永治が祭神としてまつられています。1876（明治9）年に新鼻甲の人々が先祖への感謝と村の団結のため建立しました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。